

新春恒例 とーク&トーク

地域まちづくりを考える会 2017

横プラが中間支援について考える

～360度 本音トーク～

記 録 集

2017年3月

特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク

目次

はじめに	1
実施概要・案内チラシ	2
1. 事例紹介	3
① ぐるっと緑道～けしかけ支援～ 内海 宏	4
② いえ・みち まち改善事業～パッシブ支援～ 杉野 展子	6
③ もりのお茶の間～押しつけ支援～ 櫻井 淳	8
④ 神奈川区魅力さかせ隊～ネバネバ支援～ 吉田 洋子	10
2. フリーディスカッション	13
■コーディネーターが地域に入ること	14
■専門家とコーディネーター	16
■学生と地域をコーディネート	18
■町を生かすも殺すもコーディネーター次第	19
■行政からの委託事業ではできないこと	21
■地域ごとの特殊解を導き出す	24
■ハードとソフトを繋ぐ	25
■地域で隠れた人材を顕在化させる	26
■若手の感覚が地域を変えていく	28
3. 資料編	31
当日配付資料	
① ぐるっと緑道～けしかけ支援～ 内海 宏	32
② いえ・みち まち改善事業～パッシブ支援～ 杉野 展子	37
③ もりのお茶の間～押しつけ支援～ 櫻井 淳	47
④ 神奈川区魅力さかせ隊～ネバネバ支援～ 吉田 洋子	53
アンケート結果	63
今日の感想	
今後の議論のテーマ	

はじめに

横浜のまちづくりについて、ジャンルを越えてたくさんの方々と熱く語る「とーく&トーク」はおかげさまで5回目を迎えました。前理事長山本耕平氏が始めた新春イベントは多くの方々の関心を集め、まちづくりの議論を身近に引き寄せる場として定着してきました。

今回のテーマは“横プラが中間支援について考える”です。

横プラは自他ともに認める中間支援組織だと思います。そして市民のみなさんのまちづくり活動を支援する組織はいくつもあります。それも市民活動が活発な横浜ならではの特徴です。

年末の定例会で今回のトーク&とーくのテーマについて話し合ったところ、すぐに議論が白熱してきました。「中間」とは市民と行政の中間なのか、どちらかという市民寄りの立ち位置だ、一口に「支援」と言っても本当に市民のみなさんの力になっているのだろうか、足を引っ張っていることもあるのではないか、行政に対しても寄与していることがあるのではないか、と会議室を追い出される時間まで延々と意見が交わされました。

今回のセッションでは、ご来場いただきました多くの方々のご意見を交えることで、とても視点が広がりました。いわゆる支援を受けられる立場の住民の方々にもご参加いただきました。画期的なことだったと思います。みなさまに改めて感謝申し上げます。

思い巡らせれば、様々なシーンで力を発揮している市民と行政、そして支援をしている方々の顔が次から次へと浮かびます。その方々の思いこそが私たちの活動の支えになっているということに気づきます。次回はさらに議論を深めたいと思います、と予告編を差し上げて冒頭の挨拶といたします。

特定非営利活動法人横浜プランナーズネットワーク

理事長 奥村玄

実施概要・案内チラシ

新春恒例 トーク&トーク 地域まらづくりを語る会

横プラが中間支援について考える ～360度本音トーク～



■ 概要

日時 平成 29 年 1 月 13 日 (金) 17:45 ～ 20:30

場所 横浜市開港記念会館 1号室
横浜市中区本町1丁目6番地

アクセス

1. JR 京浜東北線・根岸線「関内駅」南口から徒歩 10 分 (約 700m)
2. 市営地下鉄線「関内駅」1 番出口から徒歩 10 分 (約 700m)
3. みなとみらい線「日本大通り駅」1 番出口から徒歩 1 分 (約 50m)

参加料 999 円 (資料・報告書代含む)

※通常 1,000 円のところ、今回だけの特別価格!?

主催 特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク

■ 主旨

横浜プランナーズネットワークは、横浜市地域まらづくり推進条例の「まらづくり支援団体」として活動をして参りましたが、地域の課題は防災、環境、高齢化、子育て、障害など多岐にわたっており、その背景や担い手によって、その解決に向けたアプローチも変わってきます。

市内で活動している様々な NPO や市民団体を支援してきた横浜プランナーズネットワークのコーディネーター達から、工夫を凝らした中間支援のかたちについて話を聞き、地域まらづくりの枠を超えて多様な分野での活動を視野に入れて、中間支援が担う役割について本音で議論をします。



■ プログラム

17:45【開会】

挨拶 理事長 奥村 玄

17:50【事例紹介】 ～バッシブ支援から押しつけ支援まで～

- ① ぐるっと緑道～けしかけ支援～ 内海 宏
- ② いえ・みら まら改善事業～バッシブ支援～ 杉野 展子
- ③ もりのお茶の間～押しつけ支援～ 櫻井 淳
- ④ 神奈川区魅力さかせ隊～ネバネバ支援～ 吉田 洋子

18:30【休憩】

18:40【フリーディスカッション】

～会場も巻き込んで360度本音トーク～

20:30【閉会】

閉会后、賀詞交換会を予定しております。

参加を希望される方は、受付時にお申し出下さい。

ふらっと立寄りも大歓迎！
資料準備がありますので、
できれば事前に下記あてに
ご一報下さると助かります。

特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク
中区山下町 25 番地 インベリアルビル 201 号
Tel/Fax 045-681-2922 Mail yokopula@gmail.com

・スピーカーの敬称は略しております。
・プログラムの内容は変更とすることがあります。

1. 事例紹介

～パッシブ支援から押しつけ支援まで～

① ぐるっと緑道～けしかけ支援～ 内海 宏

「ぐるっと緑道」は最初は研究会としてスタートしたもので、2006年10月からコーディネーター派遣が始まりました。市営地下鉄中川駅前に歩道が途切れている場所があり、車と歩行者の関係をどうにか安全なかたちにしようと、まち普請事業に応募したのですが落選してしまいました。しかし何とかして安全にしたいという希望は持ち続け、最後は亡くなった中澤さんが「コーディネーター派遣をしましょう」と提案してくださりスタートしました。



当初は月1回の研究会を開いていました。第一ステップの目標は少し途切れた歩道の整備でしたが、第二ステップは、中川駅前商店街は人通りも少なく、お店も少しずつなくなっていくというさびれた状況も進行していたので、そこを何とかしたいという話になり、第三ステップでは中川西小学校区のまちづくりまで取り組んでこうという、少し中長期の展望を作り上げる作業までを最初の年度に行いました。

年度の締めくくりに、東京都市大学で協働のまちづくりや都市政策を専門としていた室田先生にもお声かけしてシンポジウムを開催して、車椅子やベビーカーの人が実際にどれだけ危険な目に遭い苦労しているのかという話をしてもらいました。その後、半年ほど活動した2007年5月に、既存のメンバーだけで課題を解決するのは難しいという話になり、地区振興会という商店街の会長さんをメンバーに入れ、室田先生にもサブコーディネーターとして入っていただくこととなり、それ以降ずっと都市大学との関わりを続けています。

スクールゾーンですぐ手前まで歩行者専用道があるものの、ここから急に何もなくなる状態、最初は車道との間に白線を引いて歩道機能を確保しました。しかし、実験をしてみるとトラックがカーブをすると歩道側にはみ出してしまう危ない状態でした。次のステップでは歩道にグリーン舗装をしましたが、状況は改善されませんでした。室田研究室にはビデオでの定点観測や交通量調査でお手伝いいただくとともに、利用者・近隣マンションへのアンケート調査を実施するなど、いかに危ないかの根拠を得る検証データを積み重ねました。また、定点観測を始めるあたりから、所管する土木事務所にも研究会に参加してもらい、要望ではなく一緒に考えていくかたちをとり、結果的にこれがよかったと思います。

調査結果は、白線引きやグリーン舗装化で少し安全にはなったものの、まだ十分な安全性は確保されていないというものでした。最終的には、歩道と車道の上にポールを付ける形で歩道を確保しました。道路に面したお店に用地提供をしてもらって植栽帯をセットバックして用地を生み

出しましたが、その企業との交渉もNPOが行いました。用地提供の理解を取り付けたものを、土木事務所が引き継いで改良工事を行うという形で最終的に決着しました。開始から結局5年くらいかかりましたが、「こうしてくれ」というような要望を言うのではなく、この道路の危険をいかに除去できるかということと一緒に考えるというスタンスで話し合いを継続していくことで夢を実現できたと思っています。

歩道の安全確保に目処がつき、2つ目のステップのテーマ（商店街の活性化）の検討へと移りました。毎年、年度末に開催するシンポジウムで商店街が抱える課題を考えアイデアを出したところ、カフェをやりたいという案が浮上し、女性陣メンバーで運営に関わりたいという人もいました。物販の商店街から生活支援の商店街へ転換をしていくのが一番とい



う方向性が見え、そのためにはコミュニティカフェが有効だという結論になりました。当初はまち普請事業に応募しようと考えていましたが、コンテストに当選しても整備は翌年にしなってしまうという話をしていたところ、スポーツジムの経営している商店会会長から「それなら私がやりましょう」と提案を頂いて、急遽動き出しました。スポーツジムのロビーの一角を改造して、外から自由に入出りできるカフェをつくり、家賃も相場の3分の1と低く設定していただき、「ほっとカフェ中川」として今も続いています。修論の学生が他のコミュニティカフェの事例調査をして、中川の特性にあったカフェのコンセプトを考えてくれた下敷きができていたので、6月の発案から10月のオープンまで短期間でカフェが実現しました。

商店街全体の広がりのある活性化の提案として、緑道やイベント広場等の整備をまち普請事業に提案し、私からすると徐々に広がりのあるまちづくりらしい提案になったなと思いました。コンテストに当選して、平成25年度の事業として、総勢800人くらいの方が関わる広がりのある事業が実施されました。「ぐるっと緑道」の特徴は、ひとつのプロジェクトごとに担い手を発掘して、興味ある人をその都度集めて巻き込んでいくという「けしかけ」の特徴が遺憾なく発揮されています。スタート段階での私の関わり、ステップアップする段階での私とか都市大の関わりは次第に後退し、ジャンプ段階になると物事の解決の段取りや方法等がかなり身につけていたので、私はほとんど何もしていません。最近では、都市計画マスタープランの中川地区のプランづくりに深く関与し、これからそれを実行に移していくプロセスに入っています。今日はまちづくりの継続的な支援が、3つのステップごとに具体的にどう変化していったかの話をさせていただきました。

② いえ・みち まち改善事業～パッシブ支援～ 杉野 展子

今日は、横プラの伊藤洋さんと2人でやっている中区本郷町3丁目地区の「いえ・みち まち改善事業」について、私自身が感じたことをお話ししたいと思います。「いえ・みち まち改善事業」とは、密集市街地における防災性の向上と住環境の改善を図る事業で、今は「まちの不燃化推進事業」といっていますが、「いえ・みち」のほうが馴染みもあるので、今日は「いえ・みち」という言葉を使います。



「いえ・みち」の対象地区は住宅戸数密度、倒壊危険条件、延焼危険条件、基盤条件からあぶり出された防災上課題のある地域です。密集市街地なので横浜の臨海部の古くからの市街地にあり、23地区660haが対象で、このうち12地区が指定を受けて住民・行政・NPOの3者協働で取り組んでいます。平成26年に地震火災対策の強化ということで、旧事業を拡充して新しい制度ができました。ただ、拡充といっても「まちづくり」の部分が拡充されたかは疑問だと考えています。

この事業は、地域にとってネガティブな言い方をすれば、ある日突然「あなたのところは危険」という課題が降ってくるようなもので、不燃化は短期間で完成するものではないし、まち普請事業のように明確なゴールもない事業です。頑張っ取組んだ効果も災害が起こってみないとわからないので、地域のモチベーションが上がらない事業ではないかと思うのですが、実際は、地域の方々は頑張っています。このような事業においてどういう支援をするのかが、今日タイトルにつけた「パッシブ支援」です。実際に本郷町とつきあって、何をやってきたかと考えたときに、広い意味でパッシブだと感じました。パッシブは辞書にあるような消極的とか受動的とかいう意味でなく、ゆるい支援、急がない支援という意味でパッシブと言っています。

地域に根付いて住んでいる人たちのことを考える上で、対照的な話の例えとして新港埠頭での活動を挙げます。新港埠頭を活動場所として集まっていたアーティストたちが、この場所がなくなるときの展覧会に「撤収」というタイトルをつけました。これを知ったとき、そのネーミングは潔いと思う反面、この人たちには撤収という選択肢があるんだなと思いました。

商店街や町内会で頑張っている人たちは撤収という選択肢がない。そういう人たちに対してできる支援として2つの視点があり、ひとつは地域のペース・タイミングを大事にすること、もう

ひとつは新しいことをどんどん投入するのではなく、息切れしないネタを見つけていくことだと思っています。

撤収はできない地域の方は、それでも悲壮感はなく、いろいろな取り組みをされています。本郷町での具体的な取り組みを紹介したいと思います。

まずは防災マップを作りました。この頃は計画策定のコンサルタントの業務委託が入っていたので、資料のような綺麗なレイアウトで贅沢な地図をつくることができました。この時、私が何を支援していたかというところ、地域の支援ではなくコンサルタントの支援をしていたような気がします。

防災マップウォークは、せっかく作った地図を仕舞い込まずに地域の方々に活用してもらうため、防災の活動としてではなくて地域の方が日頃からやっているウォークラリーのノウハウなどを生かして、避難ルートやいっとき避難所を見て回ってもらうことをやりました。地域の力がこういう場で繋がって



いて、子ども会とかPTAとかを卒業したような女性たちが集まって途中でクイズやゲームをやることを企画したり、地元に住んでいる消防士さんが日頃は忙しいがイベントのときなら手伝えるとのことで出てきてくれたりします。

安否確認訓練は3年ほど続けています。玄関先にタオル掲げるのですが、住んでいる方が工夫をして様々な形で掲げていて、時期が11月の終わりなのでクリスマスのリースを使っている方もいました。

また、オープンスペースのない地域に公園が欲しいとのことで、駐車場だった場所を市が購入して公園として整備しました。協議会では防災上どういう使い方ができるかとか、どういう設備が必要かを考え整備計画に反映しました。公園の整備は本当に地域の悲願だったので、コーディネーターとしてはこれができたらネタがなくなってしまうのではないかと心配しながらやりました。オープニングのときは、子どもたちがみんなで並んでテープカットしようとか、地域の方が案を出しているいろんなことができました。コーディネーターよりも地域の方が話をふくらませてくれました。

私が学んだことは、「撤収しない人たち」は自分がやってきたことを大切にして、肯定して次に繋げるということです。息切れしない支援、地域のペースでのゆるい支援でも結構いろんなことができましたし、今後も支援をし続けられるのではないかと感じています。

③ もりのお茶の間～押しつけ支援～ 櫻井 淳

タイトルは「押しつけ支援」だが、私はそんなに押しつけたつもりはない。横プラでも橋本さんは押しつけ派（笑）。今日は来ていない橋本さんはデザイナーだから「こうした方がいいんじゃないか」ということを地域の方々に言って強引にやらせる、緑ヶ丘ではすごい押しつけていたから、あれくらいやったら「押しつけ」といえると思う。僕は市の人に押しつけられてプロジェクトをやっている、これはちょっと言い過ぎですけど（笑）。



こちらが「もりのお茶の間」、できたてのまち普請事業です。これまでコミュニティカフェを、さくら茶屋、ほっこり、大倉山おへそとやって、これが4つめです。今回は私もいろいろと勉強をさせてもらった事業でした。

建物が旧耐震も旧耐震で、昭和13年の同潤会の海軍住宅の建物。建築基準法ができるよりも前に建ったもので、耐震診断をしたらIs値がなんと0.1、東日本大震災のときによく倒れなかったなと思いました。構造診断をしていただいた設計事務所の方と話をし、耐震補強に500万円は使えないので、0.6くらいを目指そうということになりました。この建物、部分的にガラスブロックが使われていて、建築基準法ができてから改装したのかもしれませんが、ガラスブロックもかなり昔からあったよねということで、行政の方は非常に心が広く「グレーは白い」ということになって頂きました。

結局、この木造の建物を改装していくことになりましたが、構造補強も含めてまち普請事業の500万以内でやらなければならない、お金が絶対的に足りませんでした。ここで、地元の人たちがすごく頑張って、すぐ近くの関東学院や総合病院など、いろいろなところから寄付金をもらってきて、なんと300万円も集まりました。

構造設計の方も大変優秀な方で、耐震的には瓦屋根を取って軽くするのが一番良いのですが、それだけで100万くらい吹き飛んでしまう。実はこの時代の木造は金物を使っていないので、床を補強して土壁はそのまま耐力壁として生かし、柱と梁を構造金物で留めていくなど、手間ばかりかかってお金がかからない方法で補強をする。基礎も昔の無筋の基礎なのでボロボロになっている、それを両側から新しい基礎で挟み込むなどして、ここはお金がかかりましたが、結果的に耐震補強費は270万でおさまりました。放っておいたらすぐに潰されて壊されてしまうような建

物を、保存しながら空き家活用していくのは非常に面白かったです。こういう事業は私も初めてで大変勉強になりました。

この地区のコミュニティには9つの町内会があり、連合町内会でひとつにまとまって整備をしました。社協やケアプラザ、小学校の校長先生も応援をしてくれて、地域が結束しているいろいろなことを初めて行ったことは非常に良かったと思います。この地区はもともと関東学院の中津先生とも連携して人材マップづくりをやっていて、大学とも非常に仲が良く、実際に建物を壊すときも関東学院の学生がどっさり来て手伝ってくれて、連携が非常にうまくいきました。

建物を運営する組織をつくる時は、よくあるコミュニティカフェの事業とは違って、地元がやろうとしていたサロン事業、支え合い事業、スクール事業、それからレンタルボックス事業の4つの事業をメインとして、これは押しつけに近いですが「こうしてやってください」と言いました。人材マップを元にして拠点をつくりながら、建物の耐震補強と改



装を地域のまちづくりと連携しながら行っていくということが非常におもしろく、コーディネーターの私も勉強させてもらいました。

いまはやっと拠点の運営も動きだしました。昨年の暮れにはみなさん張り切りすぎてボロボロに疲れて、正月は10日まで休んでいました。みなさん70歳を超えたくらいの人たちなので(笑)。コミュニティカフェを始めるにあたって、まち普請事業で500万円をもらえるのはよかったのですが、構造補強に300万円もお金がかかると聞いてみんなガックリきていました。ですが、みんなできちんとやり遂げたという点ではとても面白い事業だったと思います。

④ 神奈川区魅力さかせ隊～ネバネバ支援～ 吉田 洋子

今日のテーマの「ネバネバ支援」とはなにか、私の神奈川区魅力さかせ隊への思いと役割をまずお話ししたいと思います。私はいろいろな地域にコーディネーターとして行きますが、どこに行っても高齢化、担い手不足という話を聞きます。そこで、まちに若い人の活動があると、まちが元気になるのではないかと考えたのが原点です。私の役割は若い人と地域



を繋ぐこと、そして若い人が地域で活躍できる場を作ることです。学生は入れ替わります、長い学生で4年くらいですが、大抵は1年か2年、それでも20年続けられた訳が7つあります。

1つめは私自身が学生と遊んで楽しんでいること、2つめは無理をしないで流れに任せること、やる気のある学生の登場を喜ぶことです。その時ときによって中心となる大学も変わっていきます。最初の頃は横浜国大と関東学院、学部も様々で、横国は建築でしたし関東学院は土木の学生でした。ある時は神奈川大学の建築の学生もいましたが、最近は横国大の都市基盤工学や早稲田の学生と、どんどん変わってきています。

3つめにテーマ、普通は防災とか行政寄りのテーマになるのですが、若い人の発想でまちづくりをやろうということで、どこに視点を当てて活動するかは学生の自由で決めています。そのときどきの課題がテーマになり、学生によっても何に関心があるかが違ってきます。

4つめは学生と地域の人とを繋ぐこと。さかせ隊が活動している神奈川区は、私が中学生のときにミッションスクールに通っていた頃からの長い付き合いです。その点では地域の方々との多面的な関係がすでにあっただので、地域の方と学生とを繋ぐということは簡単にできました。

5つめに活躍できる場を作るといこと。学生はやりたいことが色々あり、その年ごとに活動内容も違います。学生のイメージに合わせて場を作るといことが、お金ということも場所ということも位置付けということもあります。実行委員会形式で行っているのですが、学生がお金は自分たちで取ってくるという企画書を書いてくることがあり、この場合、私は一歩後ろに下がります。反面、お金はないけどやりたいことがあるという場合は、区の助成金などを私がとってきます。最近は地域との繋がりも学生が自分たちでつくるといことも出てきて、私は最初に地域の人を紹介するだけといこともあります。

6つめに若い人に中間に入ってもらいます。私にも仕事があるのですべての時間を使って20年間も続けて関わっている訳ではありません。本当は若い人が、私がいなくてもやれるようにならないかと思っているのですが、いろいろな事情、例えば役所の人であつたら異動があつたり、

ふるさとに帰ってしまう場合もあり、活動が続けられなくなることがあります。また、若い人というのは一人ではなく複数人で関わるようにしています。

最後の7つめは、若い人たちとの活動について地域の人から「若い人はいない」と言われることがあります。地域で活動が継続しているから、学生が関わることに何の意味があるのと言われる。まあ、それが続いているの一言でいうと「いい加減」、でもこれは違う言葉でいうと「よい加減」です。

次に神奈川区魅力さかせ隊についてです。どうして横浜の中でも神奈川区にはよい環境やまちづくりの活動がないのか？というのがこの発端です。神奈川区民大学というのをやったらどうだろうかということで、区のお金でまちづくりの活動を起こそうとしました。そのときに横浜国大の大原先生の建築の学生たちがファシリテーション・グラフィックをやりました。次の年も含めて2年間やりましたが、最後に学生が自分たちで言い出しました「いくつかの大学の学生がせっかく出会えたのに、ここで別れるのは寂しい」そこで魅力さかせ隊が発足しました。

最初の頃は報告書を作るとか真面目な事をやっていました。このころ横浜ウォーカーが出版され、街歩きのワークショップをやっておもしろいアイデアを出しあいました。川に対しての提案もしましたが、これはいくつかの大学の学生の合作で作って、一緒にやるのがとても楽しかったようです。横浜国大で地域課題プロジェクトになったこともあって、そのときは学校の授業になり50~60人のメンバーが参加して、人数が多くて大変でした。そのあと、私のいる泉町共同オフィスが学生たちのたまり場的な拠点になりました。

また、デートプランを作ったり、東横フラワー緑道がオープンしたときにトンネルを使ったイベントの提案をしたり、行政から「好きに考えていいよ」と言ってもらいました。そのころの3年生がとても喜んで計画を立てて、それが今にも繋がっています。フラワー緑道ができたから、足で走るイベントをやろうとのことで、小学生とジョギングイベントをやりました。

今日、みなさんにお配りした「反町ジャム」も何度か発行しました。商店街で作ると商店街の中の人じゃなきゃダメとなりがちですが、学生が作っているの割と自由に自分たちの考えたコンセプトで作って、おもしろい仕掛けになったと思います。実際に学生たちとは密度濃く関わっており、元隊員の結婚式の披露宴に呼んでもらって「横浜でのお母さん」だと紹介されたりしています。

今日は実体験をもとにお話をさせてもらいましたが、繋いでいく人が大事だと思います。中間に立つ若い人を私が探してやっていますが、もしそういう人が地域にいれば若い人と一緒にまちづくりをやっているはずで、多様な世代が活躍するまちづくりができればいいと思っています。

2. フリーディスカッション

～会場も巻き込んで360度本音トーク～

■コーディネーターが地域に入ること

【 司会 】（奥村理事長／横プラ）

まず、コーディネーターが中間支援に入るきっかけから話すとわかりやすいと思います。例えば住民にとっては「寝耳に水」のパターンがありますが、内海さんから一番初めに声をかけられた時のこと、きっかけとして求められていることなどをお話し願えますか。



【 内海さん 】（発表者／横プラ）

今日お話しした「ぐるっと緑道」に関しては、まち普請事業で提案したものが落選したものの、代表は実現したいという思いが非常に強く、連日のように要望をされて、歩道の安全確保だけならば本来は交通の専門家の方がいいのではと考えていました。歩道を作るだけの活動なのかその先があるのかは、その時点ではよく分かっていませんでした。とにかく提案を実現したいという思いが強かった。ただ、市民が公共空間に手を入れるということはハードルが高い。講座で「ぐるっと緑道」に関わっていた筑波大のO先生は最適なのではないかと思いましたが、距離もあり定期的に来るのは難しかった。

最初の頃は研究会だけでなく、都筑区役所でマップ作成の仕事もやっていて、ちょうどよいのでそのO先生にはメンバーに入って頂いたのですが、研究会ではいろんな情報を私に伝えたいがために会議後の立ち話で1時間以上つかまり、それで終わらず、横浜駅まで一緒に話して帰るといことも多かった。研究会での議論の他にもたくさんのやりとりがありました。きちんと話を聞くこともスタート時は重要です。

【 司会 】

本当に目指しているところは、当事者である住民の方も分からないのでしょうか？

【 内海さん 】

そうです、専門家はそれなりに要る。毎月の研究会をやり始めて、そういう関係性もだんだん見えてきた。公共空間を改善するには、私だけでもメンバーだけでもそれは無理で、商店会の会長さんなども含めて取り組まなければならないと分かった。地域まちづくり課と相談してコーディネーターをつける仕組みを柔軟に運用してもらい、東京都市大のM先生に持ちかけて、研究会

に2年目から参加してもらった。地元の大学なので、いろいろな関わりができるのではないかと考えていた。そのためには研究会が何を旨とするのかミッションを明確にしなければならなかった。初年度はまず何をやるのかを検討して、それぞれの局面で必要な人材を巻き込んでいかなくは解決に向かわない事が見えてきた。

【 司会 】

チームを組まれたSさんは内海さんの立ち回り方はどう感じましたか。

【 Sさん 】

内海さんには地域まちづくり条例に基づくコーディネーターの派遣というかたちに来て頂いた。会長の強い思いがあって、みなで協力してやらなければならないが、組織が組織として機能していなかった時に、内海さんが入ってきてくれました。会の方向性やこんな人をメンバーに入れたほうが良いというアドバイスを頂いて、みなさんもだんだん内海さんの



言うことを理解してきて、向かっていく方向が見えてきた。会長だけでは思いのみで先走ってしまうが、内海さんがいたので無理強いするのではなくグループとしての方向性を定めてもらった。具体的な検討は各専門家に入っていたが、グループを形成しながら前へ進んでいくという点でお世話になった。

【 杉野さん 】(発表者／横プラ)

事例紹介では突然地域に降ってきた課題という話をしましたが、実際の事業の進め方は、横浜市の方が地域に入って「活動を始めませんか」と提案をしてくれて、その後、地域の方がやってみようかと勉強会が始まりました。その時にコーディネーター派遣というかたちで関わり始めました。勉強会の期間は1年関半くらいです。その頃は、防災まちづくりの最初の頃だったので、色々なことをやってみようということで、複数の支援団体による5名くらいのコーディネーターのチームで手厚く関わっていました。

私はそれまで地域の中に入ったことがなかったので、最初は見習いでした。それから協議会になって、進めていく中で横プラの伊藤さんと私がコーディネーターとして残りました。横浜で仕事を始めるまで私はコンサルタント会社にいたのですが、こういう形で地域に入ったことも町内

会と関わったこともなかったもので、とても新鮮でした。

【 司会 】

複数のコーディネーターがいる場合、やりにくい場合もありますがどうでしたか。

【 杉野さん 】

視点の違う方が複数入っているというのは、勘違いして混ぜ返すことも含めて、地元の人が情報を整理する点では役立ちました。ただ、話をどのように進めるかという議論が十分にできなかったという点では、もう少し違うやり方もあったかなと思っています。

■ 専門家とコーディネーター

【 内海さん 】

どのようなチームを組んで地域に入るかという「入り方」の方法で、いくつかの団体にチームを組んで入ることになったが、単独のチームで入る方がチームワークがよいという声もあった。知識のある専門家であれば地域のコーディネートができるという話には異論もあって、専門家であっても地域への入り方がよく分からない人もいる。

私が入った東久保地区では、横プラと一緒に都市防災研究会、まちづくりセンターの3団体、合計5人で地域に入りました。結局、まちづくりセンターのSさんは今でも関わりを持っているが、Sさん以外の人は都市防災の専門家ではあるけれど、地域とどう付き合っているのか振る舞いがわからないとか、自分の果たす役割が見つけられず支援グループから抜けていくことになりました。

【 高橋さん 】(横プラ)

いまのお話の通り、専門家は必要だが専門性だけではダメなので、市でも専門家向けの研修会を3・4回やりました。具体的なシミュレーションもしましたが、コーディネートするという力はそんなに簡単に身につかない、経験値が相当ないとうましくないということが分かりました。

防災に関しては、当時の行政はマイナス情報を市民に出すことが良いのか悪いのかという議論がずいぶんありましたが、実際に阪神大震災が起き



て、やはり出そうということになりました。地域の方からは「余計なことをやっている」と言われることを心配してきましたが、対象地区にあたる下町の方は包容力があってそれが新鮮な驚きでした。

みなさん勉強会をやりましょう、勉強会をやると専門家の方がきてくれますよという話をする
と、当時の空気感もありNPOや中間支援組織の人はあまり良く思われていなかった。町内会の人たちからするとフラフラしている専門家は嫌いだと言われる傾向があった。ただ、実際始まってみると、専門家同士の凸凹問題はあったものの、地域の方は行政を受け入れてくれたのと同じようにちゃんとNPOも受け入れてくれた。

具体的な話し合いが始まって、23箇所ある指定地区の中で協議会の設立まで行ったのが過半数にもなった、これはすごいこと、横浜の市民の力はすごい。郊外部の市民とは違う都心部の市民いわゆるインナーシティの人たち、すごくホットな町内会のコミュニティがあって、だからこういった厳しい情報でも受け入れてくれたのかなと思った。これと同じことを郊外部でやっていたら、また話は違っていただろう。

【 司会 】

今日発表頂いた「もりのお茶の間」の前の「さくら茶屋」は「押しつけ支援」だったのでしょ
うか。

【 櫻井さん 】(横プラ)

コミュニティカフェと付き合うきっかけは、横浜市の方から「ここをまち普請事業でやるから、
受かるようにして欲しい」と言われたことからでした。私は、まち普請事業は6回くらいやって
いて打率10割！黄金町や新羽町はずっと自分が関わっていたところで、みんな飽き始めていた
のでまさに必要があって整備しましたが、コミュニティカフェは受かるように盛り上げてと言わ
れてやりました。

「さくら茶屋」は提案した彼女たちが自治会と対立をしていました。いろいろなことやりたい
と提案しても自治会がダメだと言ってくる、それでも自分たちでやるしかないと考え、まち普請
事業に出会ったわけです。Oさんは500万円の助成金をもらえるなら事業が立ち上げられる、そ
して受かりたいと話していた。

カフェをやるのには「とにかく美味しいメシを作ろう！」とってみんなが実際に作ってきて、
中にはみんなが不味いと言うから気分悪くして辞めていった人もいるが、本音で向かうと向こう
も本気でものすごいものを作ってくる。だんだん中途半端にできなくなって、彼女たちと戦いを

して名物を作りあげました。さくら茶屋が今も美味しいもの作っているのはそこに原点がある。カフェは美味しいもの出せなければ流行らない、カフェに美味しい日と不味い日があるのはマズイ(笑)。

自治会と対立している仲をコーディネーターには取り持てません。一度こじれると自治会は面倒なことになって「聞いてない」と言われるのが一番怖い。ただ、最後は「さくら茶屋」を自治会長が評価して、彼女たちは自分たちの行動を自治会に認めさせました。

■学生と地域をコーディネート

【 司会 】

「神奈川区魅力さかせ隊」は言い換えれば、中間支援をする人を支援しているということになりますか。

【 吉田さん 】(発表者／横プラ)

中間支援の若い人たちは、ボランティアでなく仕事で関わっています。私も最初はコンサルタントの役員として仕事に関わらなければならなかった。はじめの頃は区の仕事をたくさんやっていました。マスタープランとか商店街の活性化とか、東横フラワー緑道の市民活動団体を立ち上げる仕事とか、色々な仕事をしている中のひとつに「神奈川区魅力さかせ隊」の学生の活動がありました。仕事として関わらないと若い人が続けていくのは無理だと思うし、仕事として商店街の活性化もやって、その上で学生たちともつきあっていくという形でやっています。

【 司会 】

学生たちにとって地域に実際に入っていくというのは結構スリリングなのではいか、受け止めやすいようにするようにコーディネートされるのが、吉田さんのポジションでしょうか。

【 吉田さん 】

仕事として入っていると、連合会長さんとか町内会長さんとかとは日常におつきあいがあるから、だんだん地域のことが見えるようになってきていて、学生たちが何かをやるときには最初に連合自治会の会長さんに学生を紹介するようにしています。会長さんからすると、私とは普段からお世話さまという関係にあるから結構受け入れてもらいやすい。実際にやるときは実行委員会を組織していて、商店会の若い50代の会長さんを実行委員長にしているので、関係は想像よりずいぶん柔らかい感じですよ。日常的に関わりを持っているとつきあい方も変わってくると感じています。

【 司会 】

地域のニーズや課題みたいなものを感じ取って、それを学生さんとコーディネートしているのですね。実際に活動している学生さんは吉田さんと出会って、また地域に入って何が変わりましたか。

【 KOさん 】(大学院生)

意識が変わった点は、まちづくりを自分のこととして捉えられたことです。住んでいる人とは違う立場から地域を見るというのは自分にとって勉強にもなるし、今後の自分のキャリアを考えるうえでも役に立つと思います。



【 KAさん 】(大学生)

神奈川魅力さかせ隊は地域で関わっている人が数多くいて、何かひとつやるたびに関係する人と交渉しなければならないので大変勉強になりました。学生が中心になって交渉をするので、学生同士の繋がりもできました。

■町を生かすも殺すもコーディネーター一次第

【 司会 】

実際に活動している地域の方にも話を聞いてみたいと思います。コーディネーターのどんなところが心強かったですか。最初と比べて何が変わりましたか。

【 Yさん 】(まちづくり協議会)

今日はコーディネーターの皆さまがどういう気持ちで支援をされているのかを知りたくて参りました。実際に支援に入っていただく中で、その町を生かすも殺すもコーディネーターの方にかかっているなど感じました。私たちは入っていただいて良かったと思っています。



私たちの協議会は2つの町内会が関わっていて、区役所からお話をもらった時にひとつでも良くなれば良いなと思って始めました。最初はやるこ

とがみえていなかったのもまち普請事業に応募しましたが、私の町内会はコンテストで落選しました。このときは本当に危機でした、やる事がなくなってしまって、華やかな場面がなくなってしまったのですが、今から振り返ってみればそのあと本当に上手くやれたなと思っています。

区役所の方もかなり困っていて、まち普請事業で整備する予定だったところを区で整地して頂いたりしました。ただ、気軽に「まち普請事業に応募してみない？」と提案することは、場合によっては町を殺すことになることもありうると思っています。町の住民は素人ばかりなので、コーディネーターのみなさまの考えを「押しつけ」たり、出てきた芽を引っ張ってしまったりすると枯れてしまいます。自治会もピンキリなので、その地域の状況をよく見て、本当にその地域のためになるのかを考えて支援をしていただかないと萎えてしまう地域もあるのではないかと思います。もっとも、萎えてしまうのには自治会にも責任があると思いますが。

私たちの地区は課題がたくさんあるので、10年間やってもネタに困ることはない、困ることが尽きない。でも、ひとつひとつ乗り越えてきて、やる前よりは全然良くなった、頑張ってやってよかったと思っています。

【 山路さん 】(横プラ)

防災は起きてみないと分からない。一昨年冬、Yさんの地区で放火がありました。地域の方が自分たちで協力をして消し止めました。その後、隣の地区でももう一件消し止めたと聞きました。これまでの取り組みの成果もあって協力をして未然に防ぐということができるようになっていっていると思います。

課題は多いというが、一緒にやっていて楽しいこともある。「山とか坂が多くて大変だね」というと、「風通しが良くていいんだ」という返答がくる。このような意識を持っている人が多いので、次から次へと、「これも出来るんじゃないか」と新たな活動を見つけ出してくる。その前向きさが楽しい。

【 大澤さん 】(横プラ)

私は川の活動を長くしているが、それぞれの地域には、いま優先的に取り組まなければならない事というのがあって、いまはちょっと防災に時間が割けないっていう時に、これをやったほうがいいと言われてもなかなか動いてくれない。そういう地域の事情が分かると、それなら少し待つかとか、ちょうどいい機会だからやってみようとか。コーディネーターの進め方が地域のタイミングと噛み合ってくると、どんどん前に進んで行くんだなと感じました。同じ話がそれぞれの地域の良さとか仕組みとかでも言える。

【 司会 】

関わる相手によっては生かすも殺すも、その気になっていただくタイミングを見計らうというお話がありましたが、Tさんはまち普請事業に長年関わって、いくつも経験がありますが、何か聞かせて頂けることはありますか？

【 Tさん 】(地域まちづくり課元職員)

私に関わった中では成功事例のほうが少ない、最終の二次コンテストまでいかないこともありました。

事務局としてコーディネーターの方と一緒に支援している時に何を考えているかという、職員という立場上、まずは行政内部をうまくまとめるということがある。それからコーディネーターの方と逆のことをやってみる、コーディネーターの方が押しつけるんだったら、私は引き止めるとか。グループの中でもグングン進めていく人とその反対の人がいないと、引き気味の人ほとんど引いていてしまうから、常にバランスを考えて関わっている。

あと、やはり自治会とうまくいかないところはまずダメです。「さくら茶屋」の時は自治会全体ではなかった、役員の中に声高に反対している人がいた程度だったから大丈夫だった。

■行政からの委託事業ではできないこと

【 司会 】

コーディネーターと逆の立場でいることで、住民の方々に選択肢を与えられているというところがいい関わり方だったんだなと思いました。橋本さんも一本松などでまち普請事業に関わってこられました、名言だなと思ったのは「委託事業ではできないことをやりたい」という言葉、これはどういう意味ですか。

【 橋本さん 】(横プラ)

市からの委託事業は、契約に見あった成果を上げなければならないが、まち普請事業は費用対効果はあまり関係ない、委託事業とは違う内容のものが多。私は公園の設計の仕事を多くしているが、まち普請事業での提案は公園の設計上あり得ないことを行うわけです、そのような提案を支援するという



ことは委託事業ではあり得ない。委託であればせいぜい、方向性を提示するレベルで終わります。

たとえば公園内で雨水を貯めるとか、普通に提案すればまず成り立ちません、管理者から反対を受けます。雨水を使ってどろんこ遊びができる場所をつくるとか、市民が実際にそういう活動をするので実現したりすることもある。ある意味では「押しつけ」もあるけれども、そういう事ができるという情報を持っていない場所で押しつけることは、キッカケとなって地域が活性化することもあるから押しつけてもいいと考えている。デザインについても押しつけている部分もあるかもしれませんが、そこで真剣に考えて提案していくということは、まち普請事業がこれだけの話題を生んでいる理由のひとつだと思います。

【 司会 】

地域が潜在的に望んでいることをピンポイントで見せてあげることも期待されていると思います。中間支援する際の原則とは具体的に何でしょうか。こういう条件をつくったり、整っていると支援が進みやすいことなどはありますか。

【 内海さん 】

私が横プラとして関わった印象深いコーディネートはともに団体派遣でした。1つは市営地下鉄グリーンラインの新駅周辺どう整備するかという事案です。今は一部が区画整理されることになっていますが、事業が始まる前のいちばん最初に派遣されて行きました。横プラとして誰を派遣しようかと検討をしましたが、道路整備に強い専門家とか、区画整理事業に強い専門家とか、周辺で考えられる様々な手法をアドバイスできる6人のチームで入りました。

地元の方からは専門家の方がきたという期待感から「さあ絵を描いてくれ」と最初に言われました。これに対して、僕らはみなさんの望む街がどういう街かを聞かないと絵は描けない、みんなで意見を出しあいながら、どんなまちづくりをするのがいいのかを決めて来ている、みんなで合意したものを絵に描くお手伝いをしに来たのであって、勝手に絵を描くために来ているのではない、最初の2回くらいはそれが理解してもらえず、話し合いが空転しました。

最終的には理解してもらって、駅周辺の課題を出しあうワークショップをやることからスタートして、この地域は区画整理をする、この地域は少し密集しているので地区計画的な手法で道路を拡幅する、というようにまちづくりの処方箋の違いを図式化して、駅周辺の整備計画を立てていきました。昔の集落の面影が残っているところもあったので、集落環境を保存した住宅地にすべきではないかとかいう提案もしながら、最終的には計画を受け取ってもらい、今は区画整理をする部分で組合をつくって事業を進めています。区画整理の準備組合の設立説明会の席で、組合

長に「最初はどうなるかわからなかったけど、来てもらってよかった」と言ってもらえ、派遣で行ったことが報われたと感じたものです。

もうひとつは、幹線道路沿道と低層住宅からなる地区で、ゾーニングをして地区計画への転換を図りたいという話があって、横プラが団体派遣で行きました。地区計画を推進する人と反対する人がいて、横浜市は賛成派を支援して欲しかったみたいですが、僕らは地域が割れたまま地区計画に転換するのは避けたかった。割れない形で合意形成ができる場を作ってもらい、きちんと意見交換できるようにするのが私たちの役割との想いで入りましたが、結局その場を一度もセッ
トしてもらえませんでした。横浜市からは次年度も続けてやって欲しいと言われたましたが、反対派と推進派の関係をとりもつような場ができなければ、地域が2つに割れたままで分解してわだかまりが残るのは本意ではないということで、2年目は断りました。横プラとして中間支援に関わる中で、この2件は中間支援のあり方に関わる典型的なことであったと思い、話をさせていただきました。

【 司会 】

次は杉野さん、中間支援する際の原則、揃っているとよい条件はありますか。

【 杉野さん 】

住民の協議会などの中で、人によって小さな考えの違いや手順の違いがあるので、それにどう対応するかをいつも悩んでいます。もう少し具体的に言うと、協議会といっても実質的に町内会の組織の人たちが担っているところが多いので、古くからのやり方や暗黙のルールとかがあって、新しいメンバーがいい考えがあっても出しにくい状況をどうしたらいいか悩みます。

進めていく中で、記録を取ることが上手な方もいるし、イベントなどの準備が得意な方もいる、様々な立ち位置の方が影響しあう中で揺さぶられて新たな動きが出ることもあります。また、別の地域では、リーダーが頑張っている分、リーダー以外の担い手が出てきにくい状況で、先が見えなくて行き詰まっているような所もあります。

私は横プラの団体派遣で地域に派遣されていますが、派遣の費用はどこから出ているのかというのをいつも意識しています。派遣という制度を地域が使って、「地域から呼ばれて来ている」というつもりでやっています。そういう意識でいる方が色々と考えやすいように思います。

■地域ごとの特殊解を導き出す

【 司会 】

コーディネーターの仕組みを作られたAさん。横プラの中間支援と当初のイメージとの違いなどをお聞かせください。

【 Aさん 】(元地域整備支援課職員)

当時、地域整備支援課と呼ばれていた時に、まち普請事業を始めた時の課長でした。中間支援制度の目的は、みなとみらいのようなゼロから新しく作る街ではなく、既に人が住んでいる街において、防災や様々な地域の課題がある中で、その街をこれからどう展開していくかを考えることです。専門家が来て「こういう街があるべき」だという話ではなく、そこで生活・活動している人が、地域の状況を見極めながら次のステップに進んでいくかが大切で、それは行政だけではできない。

そのためには地域のことを理解し把握して次の提案をできる人、絵を描くだけでなくどういう活動につながっていくのか、この人とこの人を繋げると良くなるなど複合的に見られる人が必要で、そこが中間支援の難しいところです。また、コーディネーターの方が様々な役割を担うというのが中間支援の難しいところで、人間臭い、泥臭いところもまとめて



いかななくてはならない。さらに難しいのは、まちの特性は地域によって全然違っていて、ひとつの例はその地域にしか当てはまらない。

場所が変わるたびにコーディネーターの方に中間支援をお願いするという感じで、行政にはまだまだその蓄積が足りないし、様々な事例をつくって蓄積していかなければならない。また、社会的にも高度経済成長から人口減少に向かう転換点をすでに過ぎていて、これからは未知の世界に入っていく、前例のないたくさん問題を手探りで解いていかなければならない。

【 司会 】

横プラにとってどのようなところが課題だと思いますか、またどの様にしていけばよいでしょうか。

【 Aさん 】

今の郊外部は高齢化が進んでいるが、これからの郊外部は住むだけでなく働く・活動する場所を作っていかなければならない、小さなスケールで機能をミックスして持たせていかなければならない時代になっていると考えます。これまでは、従来の仕組みでなんとか動いていた時代だったが、だんだん動かなくなってきていて、地域の人が地域の中で活動するということをやらなくてはならない時代になった。

郊外には元気な高齢者や元気な女性もたくさんいる、そういう人が地域で何ができるのかということを考えなければならぬ時代。仕事とボランティアの中間くらいの小銭を稼ぐ色々なパターンの活動を作っていかなければならない時代。このような中で実際の活動が動いてきているし、民間ではたまプラーザとかで東急さんとか企業でも動きだしている、そういういろんな新しい活動を増やしていかななくてはならない時代。

特に空き家などは、お金をどこで稼いでどこで人を動かしてといった会社みたいな運営が必要な活動だから、そのような活動をどう展開していくのかというノウハウを身につけて動かしていかなければならない時代。これからの時代に即したノウハウを勉強して、地域の方にアドバイスして行って欲しい。

■ハードとソフトを繋ぐ

【 司会 】

空き家といえば谷口さん、事業の当事者になるような可能性の人も町内にはいるのでは、というお話をされていましたが。

【 谷口さん 】(横プラ)

10年前くらいから気になっているのは郊外部、横浜の郊外がどうやって変わっていきけるのか。今、郊外の住宅地の街づくりを考える機会を得ています。競技提案だったのですが、応募したのは、空き家の活用とまちづくりを結びつけて考える機会だったからです。空き家の活用相談などをさせて頂きながら考えてきたことを整理してみたかった訳です。現在、



横浜では都心周辺を中心に空き家が増えていますが、これからは郊外でも空き家が増えてくる。

その時に、まちづくりの中で空き家をうまく活用していく必要があります。都市の成長が止まり、住宅の需要も小さくなってきています。少し前までは、住宅需要もあり、住宅が空いても住宅で埋まっていた。これからは空いてくる。

空き家問題というのは、空いた住宅を住宅として単純に埋める、ということではないんです。空き家を地域の資源としていく、今、お話があったように、郊外部の住宅地の中に働く場所、活動する場所を埋め込んでいくということが必要だと思います。空き家を活用して働く場所、活動する場所を産み出し、地域に必要な日常的なサービスなども取り込んで、住みやすくしていく必要があると思います。これは横浜の郊外にある環境の良い戸建て住宅地にとって大きな挑戦です。

地域の人たちが地域の将来を考え、空き家を生かし、住みやすく、住み続けられる住宅地に変えていく。私たちは、地域の人たちがどう考えていくのか、適切な情報や視点を出しながら一緒に考えていく。そういうことが必要になっていると思います。

【 Mさん 】(栄区区政推進課職員)

まちづくりは目に見えないもの、土木で整備するハードは目に見える。空き家をどのように使いたい人がいるのかなど、見えないものがたくさんある。人が使うということは結局はソフトが大事なんだと、そのために何をすべきなんだろうという、目に見えないことを行うことがすごく大変でした。



横プラの方々、サロンだとかにたくさん携わっています。結局は空き家があって、それを使いたいという強い意思を持った住民がいて、それをコーディネートする横プラなどがいて、それを支える行政がいて、それぞれが全員で持ち上がる。1点ではできないものが、2点、3点で持ち上げたらサロンができ、住民にとっての居場所ができる。まちづくりについては、このような視点が勉強になりました。見えないものに仕事として携わる者として、横プラさんと一緒に関わって大変勉強になっています。

■地域で隠れた人材を顕在化させる

【 櫻井さん 】

まち普請事業はハード事業、ハード整備に対して500万円をくれるというが、「さくら茶屋」でもハードを成り立たせるためにたくさんのソフトをやらなければならなかった。先ほど自治会と

の対立の話がありましたが、まち普請事業では人材をどうやって起こしてくるかが大事で、エツという人が湧いてきたりする。ある地域では、理事長が病気になったのをきっかけに、思わぬところからすごい人材が出てきて乗り越えたケースもある。この人がいればコンサルタントは要らないのではないかというくらい、隠れた人材、そういう人を顕在化させることがまち普請事業では重要です。

街が困らないと人は考えない、まちづくりは課題をいろんな人が考えること、困ったときにすごい人が出てくる、これが楽しい。最近、郊外の空き家問題でコミュニティカフェが多いのはそこだと思います。空き家が多くて働く場所がないけど、高学歴の高齢者がゴロゴロしている。コミュニティカフェをやりたい人がいっぱい、とんでもない能力の人がいる。そういう人材をどう生かすか、というのは地域活性化で大事なことではないでしょうか。それが僕らの役割です。

【 司会 】

横浜コミュニティカフェネットワークの鈴木さん、最近の動向と宣伝をお願いします。

【 鈴木さん 】(横プラ／横浜コミュニティカフェネットワーク)

地域まちづくり課のまちづくりコーディネーターに登録して、今は横プラの定例会に毎月参加させてもらっています。大倉山でコミュニティカフェをやっていて、6年前の8月に突然降って湧いたように「やりませんか」と言われてその年の11月に始めたのですが、地域のお母さんたちと「こういうものがあつたらいいね」と話しながら始めてみました。



地域の中にプラットフォームのような拠点があると、いろいろなことが始まっていってすごく面白くて、店番をしているお母さんが「ここにいると、いろいろな人がやってきてすごく楽しい」と言っていました。今日も新しいワークショップを始める話がスタートして、こういう場所があることの面白さと、コミュニティカフェ自体が人を繋いだり活動を繋いだりという中間支援機能みたいなものを持っていると感じています。

横浜コミュニティカフェネットワークは、コミュニティカフェが持つ中間支援機能はどのようなものかを考える団体ですが、地域にある小さいコミュニティカフェでやっている中間支援も重要で、いろいろな人たちが繋がりながら出来ていくところが面白いと思っています。私たちのような、地域に近い人たちがこういう場にもっと出て行けばいいなと思っています。

■若手の感覚が地域を変えていく

【 吉田さん 】

学生や若い人たちに一緒にまちづくりに関わってもらうためのヒントの話もさせてください。魅力さかせ隊を始めて20年、行政や商店街の人が若い人たちを手として使おうとすると学生もついてこないが、学生が地域に入って自分で地域のことを考えているから続いているのだと思います。課題を与えられた学生は悩みまくって大変ですが、そういう企画そのものを大人も一緒に考えていかなければ、学生も一緒に楽しんでもらえない。

学生は頭でっかちだから地べたから学んで欲しい。私たちはゴミ拾いもやっていて、やっているのを地域の人が見ている。町内会長さんをご苦労だねって声をかけるところから始まる場所もあります。町内会長さんなどは若い人が地域で活動しているとすごく嬉しそう、そういうところを見ると苦労も多いけどやっていてよかったなと思います。

神奈川区も高齢化が進んでいるので、若い人が地域に入っていくようなコツを考えたほうがいい。自治会・町内会の活動も大事だけど、多様な人が関わるまち、違った人たちが入ってこられるまちを作ったほうがいいのではないかなと思います。

【 司会 】

最後に、地域まちづくり課のIさんに、横プラに期待されていることや注文はございますか。

【 Iさん 】(地域まちづくり課職員)

今日のテーマの「押しつけ支援」は、いま本当に庁内で議論しているところです。まち普請事業は素晴らしいが、劇薬だから副作用もある、地域まちづくりの支援制度は他にもあり、さらに横浜市全体では様々な支援制度があります。地域の状況を見た中で、うまく支援の仕組みとかを押しつけてくれればいいのかと思っています。たとえば福祉の課題解決を実現するためにもハードなまちづくりが必要だとうまく押し付けてくれればいい、私たちも福祉とか防災とかとの連携ができるように庁内で発破をかけて、押しつけのやり方を検討しています。



若手の話はもっとしていかななくてはならない、若手を地域の担い手として考えていかないと、

地域も良くならないし残れない。最近、まち普請事業でも若手のグループの提案が多い、西区のカサコのメンバーも20代が中心、一次提案の段階ではもっと地域と繋がらないといけないと話をした。自治会も地域の創生に努めている人としっかり繋がってほしい。若い人をうまく生かしたり、まちの担い手としてもっと考えていかなければならなりません。我々の世代とは違う感覚で地域と繋がりたいと思っている方がいると思うので、横プラにもそこを考えてもらいたいと思います。

【高橋さん】(ファシリテーション・グラフィック/横プラ)

今日の話の中で、「みなさんの役割(青)」「中間支援の要件(紫)」を色別にまとめてみました。キーワードには共通の部分が多く「地域が主体である」「地域がどうしたいかを聞き出していく」「地域が目指す方向を整理する」「地域の中で必要な人員をつなぐ」「地域に隠れた人材を掘り起こす」などでした。また、「若い世代と一緒に考える」「同じ目線に立つ」ということもありました。



3. 資料編

当日配付資料

アンケート結果

当日配付資料

① ぐるっと緑道～けしかけ支援～ 内海 宏

とーく&トーク第5弾；
横プラが中間支援について考える～360度本音トーク～

ぐるっと緑道～けしかけ支援

- 1 関わり始め～コーディネーターとして関わり開始
- 2 最初の成果～企業・土木事務所との協働で歩道整備
- 3 第2の成果～企業との協働でコミュニティカフェを実現
- 4 第3の成果～まち普請で花と緑による中川ルネッサンス
- 5 コーディネーターとしての役割

横浜プランナーズネットワーク 内海 宏

2017.1.13

1 関わり始め～コーディネーターとして関わり開始

《コーディネーター派遣スタート》

- 2002年10月～YT展示場横に歩道をとの広報紙を近隣に配布
- 2006年1月～地域まちづくりグループへの登録(緑道・遊歩道の危険箇所の調査及び是正措置などの研究、実現に向けた推進)
- 2005年7月～歩道設置提案でまち普請事業に応募、31団体中14位で落選
- 2006年6月～ふれあいフェスタで、まちづくり意識調査を実施(危険箇所等の地図作成。右図)
- 2006年10月～コーディネーター派遣開始、5回の研究会を開催(活動計画の検討、アンケート調査検討、交通量調査の企画、実施)
- 2007年5月～第2期研究会の開催(歩道問題等の対応策検討を開始、地区振興会長・現都市大室田先生参画)
- 2007年12月～シンポジウム開催(テーマ：中川駅前周辺の安全・安心なまちづくり)
 - 基調講演(川手先生)
 - 話題提供(3ゾーン毎、車いす利用者)
 - パネルディスカッション(小場瀬、室田、内海)



《中長期を見通した活動計画案》

- Aゾーン；途切れた遊歩道の整備
- Bゾーン；中川駅前商店街の活性化
- Cゾーン；中川西小学校区のまちづくり

※実施は、A→B→Cの順番で実現をはかる

2 最初の成果～企業・土木事務所との協働で歩道整備

《歩道整備までの経過概要》

- 2008年4月～小場瀬先生案内による旗の台コミュニティ・ゾーン形成事業見学会の実施(土木事務所道路係長の同行を提案、実施)
- 2008年6月～都筑警察・土木事務所と社会実験について協議
- 2008年7-9月～横浜トヨペットとの協議
- 2008年8月～白線工事と検証
- 2008年10月～カラー化と検証

交差点全面ハンプ・スムーズ歩道



■ 第1ステップ～白線工事と効果の検証(H20.8)

横浜トヨペット側路肩に1.5mの白線を引き、歩行者空間を作ることより歩車分離を図る。効果の確認を武蔵工大の協力により検証する。併せて歩行者空間の拡幅を検討する。



■ 第2ステップ～カラー化と効果の検証(H20.10)

横浜トヨペット側路肩歩行者空間をカラー化し、歩行者と車の識別しやすい分離をめざすとともに、車の減速、横断歩道付近のカラー化等により、横断歩道付近の安全を確保する。



■ 歩道改善の効果や定点観測等による検証

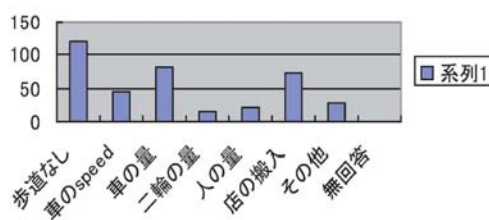
都市大室田研究室等による調査の経過

日程	検討作業の内容
2008. 7	室田研究室による交通調査
2008. 8	土木事務所による白線工事実施
2008.10	土木事務所によるカラー化工事実施
2008.11	室田研究室による交通調査、アンケート調査
2009.10	近隣マンションへの道路改善アンケート調査
2010. 3末	歩道改善工事終了
2010. 4	歩道整備事業の効果に関するアンケート調査

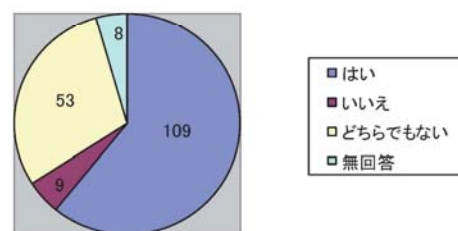
《学生による定点観測、アンケート結果まとめ》

- (1) 白線整備による効果
 - ・歩行者・二輪車の効果が確認(直進遵守型の割合が増加)
 - ・錯綜件数は減少傾向
- (2) カラー舗装による効果
 - ・自動車への効果が確認(カラー舗装内への進入減少)
 - ・歩行者・車の錯綜が減少
 - 歩行者・二輪車は、白線でも効果があるが、自動車は、白線のみよりもカラー舗装の効果が大きい
- (3) 意識への影響
 - ・安全性の向上6割
 - ・二輪車・自動車との錯綜が減少

Q8 ペイントされる前はどのように危険だったか



Q9 ペイント後は安全になったか



■ 2010年3月末、横浜トヨペットの協力で歩道設置を実現

- ・横浜トヨペット（株）の厚意を得て、同社の一部緑地部分を利用して道路を拡幅。
- ・拡幅された道路に歩道（1.5m幅）を設置。工事は年度内に都筑土木事務所が実施。
- ・L字カーブ内側のビル敷地一部を道路に使用する了解をもらい、併せてカーブミラー等を設置。
- ・その他、現在、都筑土木事務所により、「L字カーブ部→郵便局裏→学習塾までの道路の歩車区分の白線引きと一部グリーンベルト化」が行われています。



《第2回シンポジウムの開催》

■2009年2月15日 午後2～4時

・テーマ;安全・安心なまちづくりをめざして

- 1 これまでの活動報告
- 2 室田研究室による安心カラーベルトの効果等の発表
- 3 利用者からみた安全性の発表(4名)
- 4 研究会活動の振り返り(市、コーディネーター)
- 5 今後の活動方針
内海、室田、大久保、土木・区・局

《5年越しに歩道設置等を実現》

■2010年3月末～道路拡幅、歩道設置
工事、カーブミラー等の設置

→落選したまち普請提案を実現！

3 第2の成果～企業との協働でコミュニティカフェを実現

《まちづくりワークショップの開催》

■2009年12月13日

・テーマ;安全・安心なまちづくり(Bゾーンの中川駅前商店街の活性化)

- 1 話題提供
都市大の学生・先生/
ふれあい朝市会長/ケア
プラ所長/主婦
- 2 CO室田先生のとりまとめ
- 3 総括(大久保、内海)
・生活支援・サービス拠点
としての商店街へ
 - ①住民手作り品の販売等
生活文化を発信する機能
 - ②情報・コミュニケーション
機能
 - ③コミュニティと連携交流
機能

■ワークショップのまとめ(室田先生)

① 特徴(O)と商業地区の問題点(X)

- 周辺人口は増加
- 住民の地域活動参加意識は高い
- ×欲しいお店がない
- ×空き店舗が多く、人通りが少ない
- ×歩行者に安全でない箇所がある
- ×事業者の連携が弱い
- ×商業地区の構造設計に問題

② こんなまちにしたい

- ・子供、高齢者、障害者が安心、安全に暮らせるまち
- ・文化、コミュニケーションのある地域のリビング
- ・周辺緑地とつながった安心して歩ける街
- ・新鮮で安全な食品や生活用品が入手でき、健康な生活のできるまち
- ・地域と密接な関係を持った大学のある街
- ・キラッと光る店がある街

③ 具体的な改善アイデア

- ・空き店舗の有効利用
- ・地域の住民、親子の交流ができる場所作り
- ・住民、農家、学生等が自ら運営するお店やイベント
- ・こんな店が欲しいーカフェ、本屋、文具店、ファーストフード等
- ・東京都市大学の地域活動への参加
- ・地域ケアプラザの活動の活発化



■ほっとカフェ中川、フィットネスハウス内にオープン(2011.10.1)

《研究会等による事例紹介及び調査、カフェの具体化検討》

■参考事例調査(2010.9~10)

- ・Cafe・ここのたの(国立市)
- ・ふらっとステーション(戸塚区)
- ・港南台タウンカフェ(港南区)

■コンセプトや方針、具体化策等検討(2010~2011)

- ・都市大の院生との協働作業

《具体化策が決まってからの概略日程》

日程	予定	NPO設立日程	課題
6月	6/7	大久保さんの会議	・目的&コンセプトの検討 ・運営組織 ・契約形態等基本事項 ・内装イメージの検討
	6/11	研究会 会議	
7月	7/5	大久保さんの会議	・開店準備計画 ・事業内容の検討 ・営業許可申請
	7/10	内装工事の発注	
8月	8月中旬	内装工事 10 日間	・従業員教育 ・材料購入ルートの決定 ・材料の発注 ・営業許可 ・宣伝、広報
	8月下旬		
9月	9月上旬	オープン	
10月			
11月	11月末		NPO 法人承認
12月	12月初		NPO 法人登記申請
	12月末		NPO 法人登記承認
1月			ぐるっと法人が運営受託

- ① カフェメニューの提供
コーヒー・紅茶、シフォンケーキ・ピザトースト、調理パンなど
- ② 棚ショップ設置
手作り小物、雑貨等を販売、1区画の幅40cm
- ③ 地域情報の受発信
掲示板、ニュース、ホームページ等
- ④ 地域活性化の推進拠点の提供
中川ルネッサンスの実施など



4 第3の成果～まち普請で花と緑による中川ルネッサンス(H25.2.3選定、25年度事業実施)

(プロジェクトの目的)

空き店舗が目立ち、活気を失っている中川駅前商業地区を、地域の協力で、楽しく・憩い・交流する広場・空間にルネッサンスする。

(プロジェクトの構想と実施内容)

1. 商業地区のメインストリートに花と緑で魅力アップし、周辺の緑道と結ぶ
花壇、プランター、壁面緑化、花壇ベンチ、ケンパー歩道
2. 花壇に苗を供給するために、中川緑地にナーサリーを作る
3. 人々が集まる交流広場作りを行う
シンボル花壇、ベンチ、ステージ、階段絵、シンボルツリー
4. 繋がる遊歩道の魅力アップを図る。
地図・地域情報の案内板、新しい遊歩道ルート、歩道・広場に愛称

コーディネーター派遣の推移

- ・2011年度、まち普請事前検討のため6回派遣
- ・2012年度、第一次通過後、活動助成から要請
- ・2013.2月、第二次を通過(4月から事業実施)





(活動のおゆみ)
2013年2月3日 まち普請コンテストに合格し、4月から一年間にわたり事業を推進してきました。



時期	主な活動内容	参加数
2,3月	プロジェクト設計の具体化 実施スケジュール作りと推進組織NPP会の発足 都筑区とプロジェクト内容の協議	60人
4月	サフィニア190株でプランター花壇を作り、活動キックオフ 散水鉢、花壇に週4日の散水活動開始	40人
5月	街路樹花壇(7箇所)を花と緑のみち、円形プランター花壇(3箇所)を学生通り に設置	61人
6月	散水鉢、鉢巻で毎日散水体制開始 花壇手入れに月2回の定例日活動を開始 街路樹花壇(11箇所)を花と緑のみちに設置	89人
7月	商店、マンションの花壇担当体制で散水を開始 中川緑地にナーサリー用の井戸を掘りとポンプ設置 環境省「みどりの香るまちづくり企画」応募	89人
9月	ふれあいベンチ(2箇所)をステージ広場に設置	65人
10月	ハーブガーデン(4箇所)を花と緑のみちに設置	73人
11月	ステージ設置、花壇ベンチ(2箇所)とジャスミンフェンスを花と緑のみちに設置	48人
12月	シンボル花壇をステージ広場に設置	39人
2014年	環境省「みどりの香るまちづくり企画」環境大臣賞受賞	28人
1月	新しい散歩道とまち案内システム検討 交通局と駅前案内板設置の協議	
2月	歩道、広場の愛称を地域の代表からなる選考委員会で決定	36人
3月	「みどりの香るまちづくり」副賞700本の花弁植え付け 子供たちによるケンパー歩道給描き ナーサリー完成 中川西中学校美術部が階段絵「Welcome」を制作 まち案内板とまち案内プランター設置 駅前広場にリンデンバウム、駅前広場にシマトネリコのシンボルツリー設置 竣工式	150人

累計800人がルネッサンスプロジェクトに参加しました

年 (広報 回数)	主な活動	組織運営	行政・専門家支援
2003年 (1回)	都筑区生涯学習で「ぐるっと緑道・遊歩道」講座を主催	女性3人+中川駅周辺の街づくりを考える会	筑波大 小場瀬教授 川手名 賞教
2004年 (1回)	(歩行者に安全なまちづくり) 「途切れている遊歩道をつなぐ」でヨコハマまち普請に応募(落選)	ぐるっと緑道遊歩道研究会発足	区政推進課 地域まちづくり課
2006年 (1回)	横浜市地域まちづくり条例の「地域まちづくりグループ」に認定	商業地区振興会会長の参加	コーディネータ内海氏
2007年 (1回)	中川駅前商店街地区の歩道安全化案を検討	新規住民メンバーの参加	都市大室田准教授と 学生参加
2008年 (3回)	住民シンポ「中川駅周辺の安全・安心なまちづくり」を開催	ケアプラザ、朝市、都市大等が参加	都筑土木事務所道路係長
2009年 (2回)	まちづくりWS「中川駅周辺の安全・安心なまちづくりをめざして」を開催	都市大生が事務局でコミュニティカフェ研究	
2010年 (2回)	歩道の安全化工事完成		
2010年 (1回)	(みんなが集えるまちづくり) 「中川ふれあいフェスタ」の再開	研究組織から活動組織へ 振興会との共同事業始まる (株)横浜都市みらい支援金	区政推進課 地域まちづくり課 コーディネータ内海氏 都市大室田准教授
2011年 (1回)	まちづくり報告会「みんなが集え、憩える商業地区」を開催	都市大生が事務局でコミュニティカフェ研究	
2012年 (4回)	コミュニティカフェ「ほっとカフェ中川」を開店 ヨコハマまち普請「中川ルネッサンスプロジェクト」で応募 「ぐるっと緑道」としてNPO法人化	カフェ通信の毎月発行 NPO法人化	
2013年 (10回)	(花と緑のまちづくり) 「中川ルネッサンスプロジェクト」の事業化	自治会等地域の様々な団体と連携	地域まちづくり課 都筑土木事務所 都市大室田准教授
2014年 (7回)	環境省「みどりの香るまちづくりコンテスト」で環境大臣賞受賞	NRP会組織の誕生 イベントグループの誕生	
2015年 (8回)	「中川ルネッサンスプロジェクトパート2」実施 横浜市「横浜環境活動賞」受賞	小中学校との連携 「中川の街活性化プロジェクト意見交換会」発足	
2016年 (5回)	(活動地域を拡大) 中川まちづくりプラン検討	検討会に自治会、都市大等地域の様々な団体が参加し、「中川まちづくり連絡会」の発足	区政推進課 都市大室田准教授

5 コーディネーターとしての役割

- 《ホップ段階》
- 研究会でのアドバイスからスタート(これまでの経過理解と課題認識)
 - 歩道整備に欠かせないメンバー提案(地区振興会会長、都市大室田先生)
 - 短中期の取組み戦略の提示(第1回シンポでの3ゾーン展開論)
- 《ステップ段階》
- 専門家・関係者を巻き込む事例視察提案(小場瀬先生、土木・道路係長)
 - 3者協働による社会実験の提案(土木・都市大・研究会。都市大が定点観測、アンケート)
 - 取組の振り返りと方向性の提案(第2回シンポでの活動方針)
 - 今後の商店街のあり方の提案(商店街活性化WSで生活支援拠点)
 - コミュニティカフェの市内事例紹介や視察先の段取り(まち普請事前派遣6回を活用)
- 《ジャンプ段階》
- 2回の提案書のアドバイス
 - 課題発生毎の助言
 - コンテスト当日でのアドバイス
 - 歩道等愛称選考委員会での助言

いえ・みち まち改善事業 ～パッシブ支援～

特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク
(スタジオノブス) 杉野 展子

2017.01.13

「いえ・みち まち」との関わり

- 本郷町3丁目地区(中区)
(防災まちづくりの協議会活動地域12地区のうち)
- 平成17年度の勉強会から
- 横プラでコーディネータ派遣 (伊藤・杉野)
- 運営委員会(ほぼ月1回) への参加

「(旧)いえ・みち まち改善事業」とは

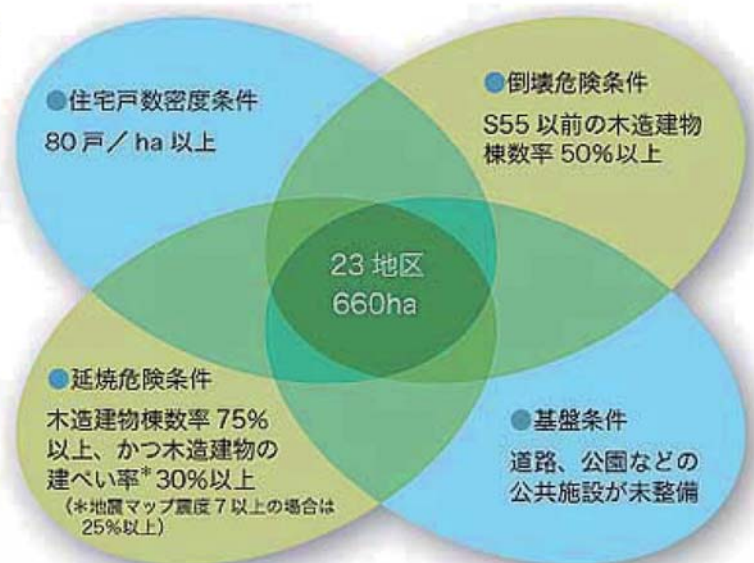
❖ どういう事業か

「防災上課題のある密集住宅市街地における、防災性の向上と住環境の改善を図り、住民と行政だけでなく、専門家やNPO等も交えた三者協働で取り組む、横浜市独自の事業です。」

「地域が目指すまちづくりを「防災まちづくり計画」として取りまとめ、その実現のために、国の住宅市街地総合整備事業の導入のほか、地域まちづくり支援制度や既存の制度を活用していきます。さらに、地域の合意形成に応じて、地区計画などのまちづくりのルールについても検討していきます。」

「(旧)いえ・みち まち改善事業」とは

❖ 対象地区 の要件



「(旧)いえ・みち まち改善事業」とは

❖対象地区の分布

対象地区面積 23地区 660.0ha

協議会活動地区 12地区



「(旧)いえ・みち まち改善事業」とは

❖まちの不燃化推進事業へ

「平成26年3月に策定した「地震防災戦略における地震火災対策方針を受け、「いえ・みち まち改善事業（旧事業）」を**拡充**し、延焼の危険性が高い地域において、建物の不燃化などにより、「燃えにくいまち・燃え広がらないまち」の実現を図るものです。」

[メニュー]

建築物の不燃化推進事業補助／身近なまちの防災施設整備事業補助／木造建築物安全相談事業／狭あい道路拡幅整備／公園、防火水槽の整備

地域にとっての事業の意味

❖ どういう事業か（地域にとって）

- ・地域の発意か？
 - ・・・行政の地区指定が降ってきた
- ・完成・期限は？
 - ・・・完成は見えないし期限もない
- ・効果・目標達成は？
 - ・・・災害が起こってみないとわからない

パッシブ支援とは

❖ パッシブ？

受動的・消極的

熱くならない支援、頑張らない支援、力の抜けた支援、ゆるい支援、急がない支援、たきつけない支援、ひっぱらない支援、



ハシマードラマスタジオ
撤収! 新・港区
2014.3/28 Fri - 4/6 Sun 12:00-19:30



パッシブ支援とは

❖何を支援するか（コーディネータとして）

- 地域のペース・タイミングを大事にする
- 息切れしないネタを見つける

本郷町3丁目地区 防災まちづくり

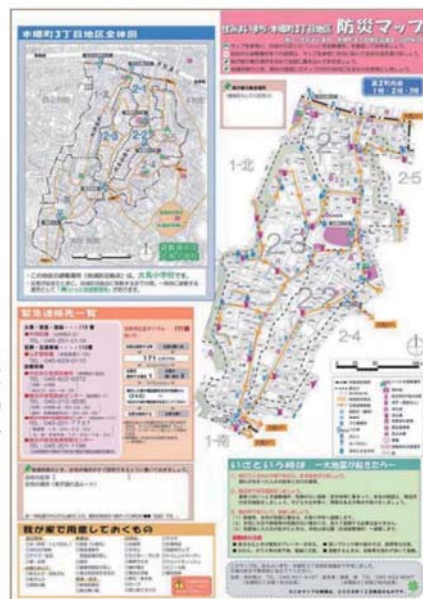
❖本郷町3丁目地区の概要

- ・中区の丘陵地にあるまち
- ・斜面地の緑は豊かで眺望のよいポイントもあるが
- ・急坂・階段・狭あい道路が多く、オープンスペースが少なく防災上の課題が大きい
- ・地区内の空地を防災公園として整備
- ・ニュースの発行（毎月：最新は114号）
- ・生活ガイドブックの作成 ・防災マップの作成
- ・「いっとき避難場所」の設置

本郷町3丁目地区 防災まちづくり

❖防災マップの作製

- ・平成19年に作成
- ・掲載内容の検討、調査、印刷方法など約1年かけて作成
- ・地区をブロックに分け作成
- ・町内全戸に配布
- ・防災情報、「まち歩き」結果の情報、災害時の知恵など役に立つ情報を掲載
- ・活動助成費の中で印刷



本郷町3丁目地区 防災まちづくり

❖ 防災マップの活用

- ・「防災マップウォーク」
(平成21年実施)
- ・マップに掲載した「避難路」や「いっとき避難所」を確認することを目的にしたイベント
- ・消防署や市の協力を得て、まちづくり協議会で実施



本郷町3丁目地区 防災まちづくり



本郷町3丁目地区 防災まちづくり



本郷町3丁目地区 防災まちづくり

❖安否確認訓練

対象 第1町内会・第2町内会全戸 実行日 平成26年11月8日

白いタオルなどを使った 災害時安否確認訓練実施

主催 本郷町3丁目地区防犯協会
協賛 本郷町3丁目地区防犯協会 第1町内会 第2町内会 消防署 消防団
協力 本郷町3丁目地区防犯協会 消防署 消防団 消防団中地区防犯協会 北方消防出動所

なぜタオルを掲げるの…???

緊急の救助・支援を必要としないお宅は、白いタオルなどがあると、一軒一軒をあたって確認しなくても、外から一目で無事がわかり、すぐに次のところに安否確認に走れるため、本当に救助を必要としている方のところへ短時間で向かうことができます。



11月22日(土) 9:00~11:00

小雨決行 大雨時の場合は、訓練は上台集会所で行います。連絡会場までお問い合わせください。

◆訓練内容◆

訓練①

白いタオルなどを使った安否確認訓練

(第1町内会・第2町内会合同実施)

■訓練方法

当日9時までに、無事ならば道路から見える玄関先やベランダ等に白いタオルなどを掲げてください。

■当日留守の場合

留守の方は、お出掛けの際に白いタオルなどを玄関先に掲げてお出掛けください。

■訓練の終了

10時半頃に掲げたタオルはお戻しください。

訓練②

避難を使った避難訓練・スタンドパイプ式初期消火器具の実演

対象者：町内の方などでも参加OK

時間：10：15～11：00

場所：ガス山公園(雨天時は上台集会所)

～訓練の流れ～

09:00 避難訓練 //

白いタオルなどを道路から見える玄関先やベランダ等に掲げてください。

町内会や消防団に案内させます。

09:00 安否確認を累計し本部(ガス山公園)に報告

09:15 避難を使った避難訓練とスタンドパイプ式初期消火器具の実演(ガス山公園)

北方消防の消防士さんによる毛布を使った
居室での避難実習やスタンドパイプ式初期
消火器具の放水体験ができます！

本郷町3丁目地区 防災まちづくり

❖安否確認訓練



本郷町3丁目地区 防災まちづくり

❖ガス山防災公園の整備

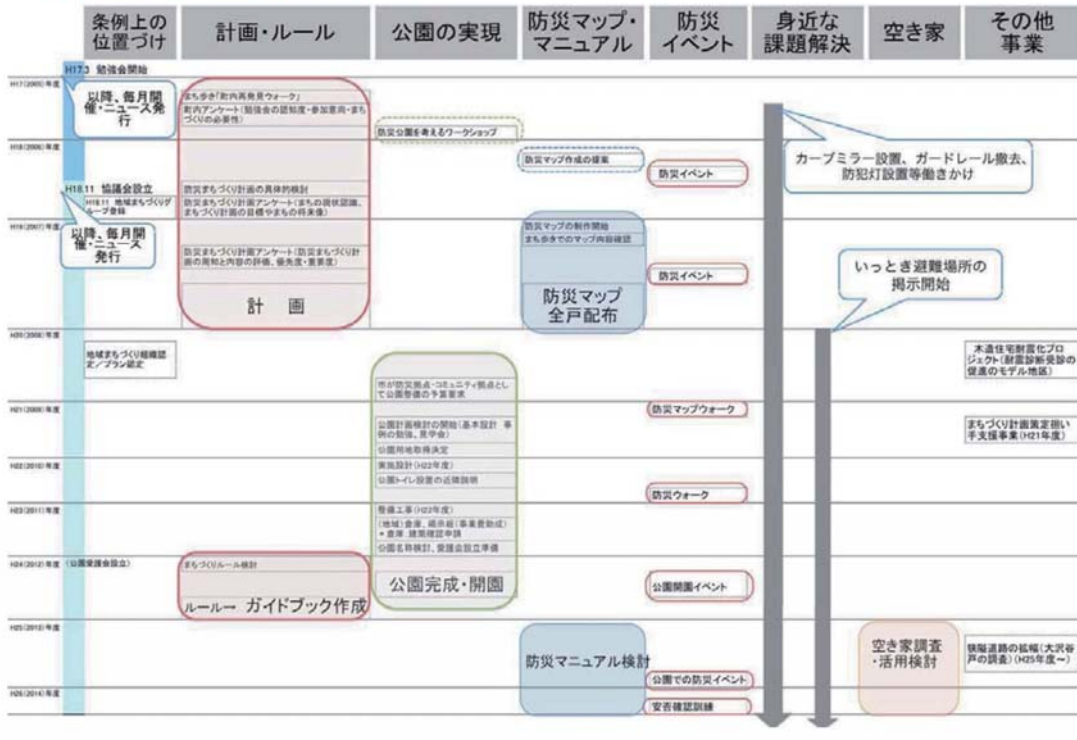


本郷町3丁目地区 防災まちづくり

❖ ガス山防災公園の整備



本郷町3丁目地区 防災まちづくり



③ もりのお茶の間～押しつけ支援～ 櫻井 淳



六浦東・まち交流ステーション委員会設立以前 拠点開設の願い

1 平成26年11月金沢区役所主催
地域大学校卒業に際しての課題・夢プラン
地域のボランティア活動の後継者が無理なく地域活動できるように
支えあいながら活動ができる場、常設の拠点の開設の夢プラン発表



2 12月、六浦東地区推進連絡会に於いて、**拠点づくりの提案。**
他のグループからも拠点の必要性の提案があり。

3 区役所地域振興の担当の方々と岩崎会長交えて、
後継者づくりのための拠点づくりの情報提供していただく。

4 12月20日六浦東・地区社協理事会に於いて、正式に提案。
地区社協の新規事業として取り上げていくことで検討開始。



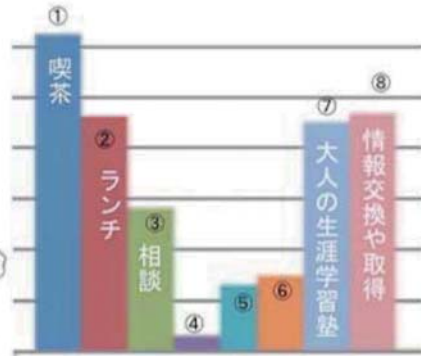
新規事業



現在困りごとがありますか。



地域に常設の拠点ができた時、**利用してみたい**と思うものは？(複数可)



- ③ 困りごとの相談とボランティアの利用
- ④ 電話訪問サービス
- ⑤ 手作り品の売買
- ⑥ 子ども対象の学習塾
- ⑦ 大人対象の生涯学習塾
- ⑧ 情報交換や取得

様々な地域のニーズ



空き家を求めての時期

地域内の空き家探し、小学校への働きかけ、地域交流室開設のための陳情書を教育委員会へ



ヨコハマ市民まち普請事業の実地見学 瀬谷区長屋門



27年度のヨコハマ市民まち普請事業に応募することに決定

六浦東・まち交流ステーション委員会設立
連合町内会、社会福祉協議会会長
岩崎会長をリーダーとして活動開始



人材マップの活動を中心に拠点づくりを！

関東学院大学中津先生のアドバイスを
もとに
4つの事業、6つの部会を立ち上げる。
さくら茶屋、ほっこり見学・受講
プレゼン用模造紙4枚の作成



地域交流ステーションの
4つの事業【6部会で運営】

- サロン事業**
 - ◆学童(1)部会
 - ◆高齢・障害の部会
 - ◆児童(2)部会
 - ◆子育て支援(2)部会
 - ◆子育て支援(1)部会
 - ◆子育て支援(1)部会
- 交流あい事業**
 - ◆高齢者支援(部会)
 - ◆子育て支援(部会)
 - ◆訪英ボランティア(部会)
- レンタルボックス貸しスペース事業**
 - ◆「レンタルボックス・貸しスペース支援」部会
 - ※自治会主任・自治会副会長の協賛による
 - ※見守りサービスと連携
 - ※見守りサービスと連携
 - ※見守りサービスと連携
- スクール事業**
 - ◆スクール事業(部会)
 - ◆スクール事業(部会)
 - ◆スクール事業(部会)
 - ◆スクール事業(部会)



7月4日 1次コンテスト
1位通過！



拠点場所振出に。空き家探し
2次コンテストに向けて活動開始



地域住民へのアンケート調査

サロンへの希望、塾への希望、
回答者の7割が困りごとを抱えている、
などの調査結果をふまえて事業内容の見直し



拠点場所9月23日 森脇さん宅に決定



2次コンテストに向けて
パワポづくり、プレゼン練習



平成28年1月31日、
2次コンテスト1位通過！



六浦東・まち交流ステーション委員会
拠点開設始動！



耐震工事の必要性

4回にわたる解体作業。
耐震工事への寄付金をお願い





拠点の名前募集！

4月募集 231件応募



「もりのお茶の間」

に決定！



もりのお茶の間ニュース発行！



もーりー誕生！



ボランティア活動へのお誘い

地域住民へのアンケート調査

- ♡品物の寄付のお願い
- ♠近隣企業への働きかけ
- ♣区役所、環境事業局のご協力
- ♢区社協、ケアプラザからの支援

ささえ愛
「ねこの手」
誕生！



各部会毎に事業の準備活動。
毎月1回の理事会、
執行委員会の開催、
各部会毎の会議、
研修会の開催

プレオープンでの練習、
近隣企業への働きかけ

種々の助成金申請を
検討応募

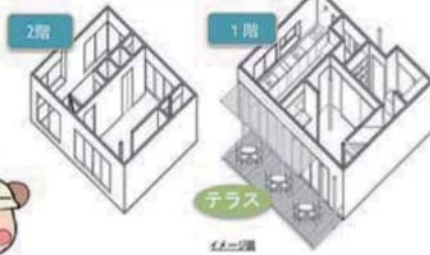


レンタルボックス
レンタルスペース





内装、外装も
みんなの力で！



地域皆さんの汗と
思いがいっぱいの



すてきな
お茶の間に！！



市、区、区社協、ケアプラザ、近隣企業、小・中・大学、皆様のご支援をいただき、
地域住民の皆さんが心から願い、
住民自らが動いてできあがる

「もりのお茶の間」11月10日本日オープン！



そしてこれから



住民同士の輝き！

もりのお茶の間

まってま〜す♪



末永く愛される
お茶の間に
なりますように

六浦東・まち交流ステーション委員会
平成28年11月10日

神奈川区魅力さかせ隊 ～ネバネバ支援～

2017年1月13日
吉田 洋子

神奈川区魅力さかせ隊におけるネバネバ支援とは？



私のさかせ隊への思いと役割

まちに若い人の活動があるとまちが元気になる！！

- ① 若い人と地域をつなぐ
- ② 若い人が活躍できる場をつくる

(支援なのか？と考えてしまった)



神奈川県魅力さかせ隊におけるネバネバ支援とは？

学生は入れ替わる！それでも継続できた理由は？

① 私自身が学生と遊んでいる（楽しんでいる）

とくに最近は若い人からエネルギーをもらっている

② 無理をしないで流れにまかせる

やる気のある学生の登場を喜ぶ

（時代によって中心の大学も学科も様々）

③ テーマ

その時代ごとの課題を学生に投げかけるが、どこに視点をあてて活動するかは学生の自由

2

神奈川県魅力さかせ隊におけるネバネバ支援とは？

学生は入れ替わる！それでも継続できた理由は？

④ 学生と地域の人をつなぐ

私の長い地域とのつながりから簡単につながることが可能

⑤ 「活躍できる場」をつくる

学生の活躍のイメージにあわせて場をつくる

（お金、モノ、場所、位置づけ）

⑥ 中間に若い人に入ってもらう

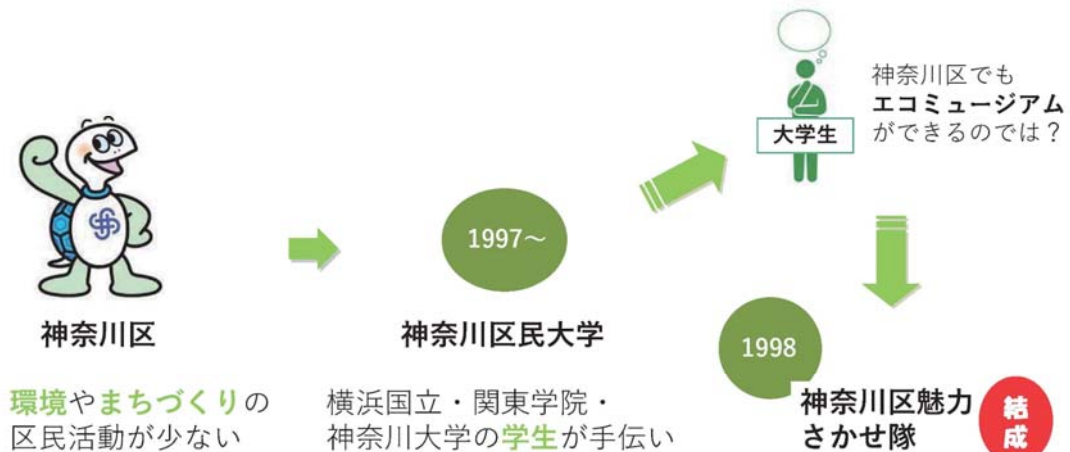
ひとことで言えば

いい加減（よい加減とも言う）



3

神奈川県魅力さかせ隊のこれまで



<http://www.city.yokohama.lg.jp/kanagawa/kusei/profile/kametarou/>

4

エコミュージアムの構想と実現について (1998~2005)

1998 報告書「魅力さがしのススメ」作成

1999~ 入江川をフィールドに多様なイベントを開催
よこはま川フォーラムで話題となる

模型付き、
スライド式、
絵本型、
たまちゃん新聞
パネル

2000~ 「エコライフかながわ」を舞台に、環境リサイクル連続講座、古いもの探し、ゴミアート、逆コンビニ、遊び場調査

5

エコミュージアムの構想と実現について (1998~2005)

2003~ YOKOMICHI WALKER 発行

(入江川・色彩編、緑のエコミュージアムマップ、エコミュージアムネットワーク)

神奈川区の多様なイベントに参加

(友・遊・まちづくりフォーラム、東海道シンポジウム)

市民活動団体や小学生と連携
県民センターなどで打ち合わせ



6

2003年~2004年 YOKOMICHI WALKER



7

2006年 流域歩きワークショップ



2006年 入江川



神奈川県魅力さかせ隊 拠点での活動 (2006)



2006～ 横浜国立大学 地域課題プロジェクト
入江川 流域ワークショップ など

2009 泉町共同オフィス オープン

(番外編 ヨコハマ市民まち普請事業への参加、うらしま組)

神奈川区のイベントにつづけて参加

水と緑の日、友・遊・まちづくりフォーラム、湊フェスタ など

2009年 デートプラン

DatePlan 1 神・六・池 (白家駅周辺)
オススメタイミング
時期：初秋
時期：夏過ぎ

DatePlan 2 角・殿・宮 (入江川流域)
今日は一日「川」をテーマに歩いてみよう。神奈川区自然の入り口。大口清流の安くておいしい魚子を食べた後は、のんびり川縁を散歩する。魚の甲羅干しを見ることができ、川は途中、清流ながら少しこがら海まで流れている。子ども心に覚えて、遊んでみよう。

DatePlan 3 森・空・猫 (神奈川の水辺)
神奈川区の水辺は隠れた魅力が満載だ。子安駅を降りるとそこは緑のまら。緑地を多くと何気ない道が通っていて、理立地帯は新しいビルが立ちあがり、なかに無料でも入れる展望台も。そして、川には毎朝の真にあるバーベキュー。猫が息を吐く水辺の風景を想いはジュウゴクから流れるあの歌だ。

オススメタイミング
時期：夏
時期：夕方～夜

PLANPLAN * DatePlan
神奈川県魅力さかせ隊



学生の論文

横浜国立大学（複数）
東海大学 建築 など



就職支援

面接練習
エントリーシートの書き方も

（おちた学生はいない！
公務員も民間も）

18

神奈川県魅力さかせ隊の活動を参考に



横浜のいろいろな地域で若い人がまちづくりの活動に参加できるようになってほしい

多様な世代が活躍するまちづくりへ

19

アンケート結果

今日の感想

- ・自治会メンバーとして参加しました。行政・中間支援・住民の参加する Talk は非常に面白かった。
- ・まちづくり協議会の会で、コーディネーターさんから今回の事を聞きまして、一度参加してみようと思いました。
- ・どの地域でも考えている人はいますが、現実的に動いてみるためには、やはり中間支援が必要と感じています。◀役所と直接話す事はむずかしいですから。
- ・話をうかがっているうちに横プラの動きがわかった様な気がします。来てよかったです。
- ・現在山手本牧地区でコミュニティカフェのようなものを地域住民と計画していて、設計に入ったところです。もともと「山手やってみよう会」の中の障害に理解のある町づくりプロジェクトメンバーの中から始まりました。このまち普請事業と進めることはできないだろうかと思っています。
- ・横プラさんの土俵で様々な話を聞く機会は重要だし経験豊富なので楽しかった。本音（に近い）声も多く、良い話が聞けた。
- ・コーディネートの魅力や難しさを知ることができた。
- ・まち普請、いえみち、学生といった違った切口からの事例のため、様々な話が聞けて参考になった。
- ・コーディネーター以外にも学生や地域の方などからも話が聞けたのでよかったです。
- ・「まち普請」がまちを枯れさせてしまうこともある（一本松の方談）との話は考えさせられた。
- ・学生として聞きましたが、将来を考えながら聞きました。
- ・自分が仕事としてまちづくりに関わる可能性もありますし、逆に、住民としてまちを支える可能性もある、と考えさせられ、難しさや心持を知ることができました。
- ・地域との距離感、間合いを意識したコーディネートの実体験が非常に参考になりました。
- ・前段の事例紹介はコンパクトで良かったですが、プロジェクトの内容をよく知らない身にとってはもう少し時間をとって説明いただいても良かったかなと思いました。ただ後段のディスカッションの中身がとても良かったので、この時間配分でも良かったと思いました。
- ・小さなことからまちづくりに拓げていく継続的なたりくみの大事さが印象的でした。

今後の議論のテーマ

- ・地域のニーズとは？
- ・地元との接し方・担い手の探し方等にフォーカスしたもののコーディネーターへの就職（？）はどうするのか（お金はどう発生するのか？）地域の人材の掘りおこし方（桜井淳さんがおっしゃった話）
- ・空き家の活用／人口減社会の中での交通利便性の悪い郊外住宅地の魅力
- ・次回も期待しています

新春恒例　とーく&トーク　地域まちづくりを考える会　2017

横プラが中間支援について考える　～360度本音トーク～

記 録 集

2017年3月

編集・発行　特定非営利活動法人　横浜プランナーズネットワーク

〒231-0023　横浜市中区山下町25　インペリアルビル201

本事業は「まちづくり支援事業助成金」（都市整備局）の交付を受けて実施しました。

